

❖ 講 演 会 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター学術講演会

近世後期の京都文壇
—妙法院宮真仁法親王とその周辺—

2018 年 11 月 22 日(木) 15:00～16:30

龍谷大学大宮学舎 北翼 204 教室



飯倉洋一氏
(大阪大学教授)

❖ 講 演 会 の 概 要 ❖

大阪大学教授、飯倉洋一氏による近世の京都の文化をめぐる講演。これまで注目されることの少なかった妙法院宮真仁法親王（1768-1805）とその周辺に焦点をあて、近世後期の京都文壇がどのようなものであったか議論された。

妙法院宮真仁法親王は、江戸時代の中～後期に京都東山の妙法院門跡をつとめた人物である。1768 年、閑院宮典仁親王の第五子として生まれ、1769 年に 2 歳で妙法院を継承する。1778 年に後桃園天皇の養子となり、1786 年、19 歳で天台座主に任命される。その後、1795

年に天台座主職を辞し、1805 年、38 歳の若さで没した。

他方、真仁法親王は書画と詩歌に優れ、「地下」（じげ）の文化人・知識人とも積極的に交わったと伝えられる。本学術講演会では、真仁法親王の日記をはじめとする各種資料に記される文人または画師との交流の様子、関係性に焦点をあて、親王の周囲に形成された「サロン」、同時代の京都文壇の実態解明が試みられた。

講演に際し、飯倉氏より配布された資料の章立ては、下記の通りである。

- I 妙法院宮真仁法親王
- II 真仁法親王とそのサロン
- III 御直日記・妙法院日次記にみる文人・画師との交流
- IV 蘆庵・秋成・宣長と妙法院宮
- V 『絵本太閤記』と妙法院宮官人

講演は、以上の章立てに沿って進行した。各章の詳しい内容は、次に述べる通りである。

先ず「I 妙法院宮真仁法親王」において、東山天皇から妙法院宮真仁法親王に至る系図と、桃園天皇、後桃園天皇、光格天皇等、江戸中・後期に生きた天皇の激動の人生を紹介した後、真仁法親王の生涯、上記天皇との関係、「地下」の芸文家と盛んに交流した事実とその背景について概説が試みられた。

次に「II 真仁法親王とそのサロン」で、真仁法親王が周囲からどのように理解されたか、身分を問わず優れた文化人や知識人と好んで交流した真仁法親王という、巷間に流布するイメージに関して検討が試みられた。

具体的には、①小山田与清『松屋筆記』文化十一年刊、②村田春海『織錦舎随筆』、③中島棕隠『錦西随筆』、④小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』春、⑤本間游清『みみと川』といった資料に掲載される真仁法親王と様々な芸文家の交流に関する記述が論じられた。

続いて「III 御直日記・妙法院日次記にみる文人・画師との交流」では、妙法院の当事者の記録に基づき、真仁法親王と様々な文人・画家の交流について解説がなされた。

具体的には、真仁法親王が 20 歳であった時の日記『御直日記』、および京都妙法院門跡の坊官の日次記『妙法院日次記』の内容を手がかりに、真仁法親王と円山応挙、小澤蘆庵、伊藤若冲等の交流の様子が紹介された。

「IV 蘆庵・秋成・宣長と妙法院宮」では、京都に居を構えた文化人・知識人の中でも、歌人の小沢蘆庵、同じく歌人で国学者の上田秋成、本居宣長の三者に注目し、真仁法親王との交流がいかなるものであったか、様々なエピソードについて論じられた。

最後に「V 『絵本太閤記』と妙法院宮官人」では、岡田玉山画、武内確斎著『絵本太閤記』の成立における妙法院宮関係者の役割について論じられた。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント 亀山隆彦